

地球の割れ目紀行

岡本祥一
予科5-7、
航空16-4
航空通信
(川口市)



まえがき

アイスランドを南北に地球の割れ目が走っている。その観光を組みこんだ2週間の船旅に夫婦で参加した。今年6月初旬のことである。

大西洋のほぼ中央には大西洋中央海嶺と呼ばれる海底山脈が、北極圏から南アメリカ南端まで南北に走っている。



第1図 大西洋中央海嶺

この海嶺の深部では高温のマントルが上昇し、地殻を構成している岩盤（プレート）を左右に押し広げている。そのためこの海嶺の西側には

北アメリカプレート、東側にはユーラシアプレートが作りだされており、年に数mmないし1cmの速さで互いに遠ざかっているというのである。プレートの上には大陸が乗っている。プレートが動けば大陸も動く。長い年月の移動により現在の地球の形が出来上がったと考えられている。

アイスランドではこの地球の割れ目とも言うべき大西洋中央海嶺が海上に姿を現している。そのため他所では見られない特異な景観を見ることが出来る。

首都レイクキャビックの東北、約50kmのシンクトヴェトリル国立公園では、「ギャウ」と呼ばれる大地の裂け目が幾筋も走り、また急峻な岩壁が続いている。壮大な地球の営みの一端を垣間見る目的で、はるばる出かけた次第である。

船旅

ハンブルグ港で乗船。MSCマニフィカ号、9万5千トン、イタリア系、パナマ船籍の大きな旅客船である。



第2図 MSCマニフィカ号



第3図 船旅の行程

今回の船旅の寄港地、航路を第3図に示す。初日は北海を終日クルージング。水平線に取り囲まれ、全く何も見えない。やはり北海の波は高く酔い止めを服用。

最初の寄港地ラーウイックは、英国最北のシェットランド諸島の中心地。800年以上の昔、1200年代にノルウェーからのバイキングが最初に移り住んだとされている。付近の急峻な海岸はパフィン(ツノメドリ)の集団営巣地として有名な観光地となっている。偶然1羽の可愛い姿を見ることが出来た(第4図)。



第4図 パフィン

翌日は終日航海。お昼に北極圏突入記念のパーティ。間もなく北極圏に入る。この機会に鯛の唇にキスすると幸運が舞い込むとの言い伝えがある。



第5図 鯛とキス

なんと面白い風習である(第5図)。善男善女の長い行列が続いていた。生臭そうな鯛とのキスは遠慮することとした。

アイスランド北部

北極圏に入り、北部アイスランドの主要都市アクレイリに入港。メキシコ湾流の影響で寒くはない。白銀の山に取り囲まれ、山崎カールに似た氷河の痕跡が散見された。

郊外に出ると周辺一帯はディムボルギルと呼ばれている溶岩地帯である。浅間山麓の鬼の押し出しと類似の溶岩原が広がっている。その昔、この地帯に溶岩湖があり、溶岩が流れ去る際に残された部分が浸食を受けて現在のような地形となったものと考えられている(第6図)。



第6図 アクレイリ郊外の溶岩原

此の写真の遠方に見える山の上部分が平坦である。このようなテーブル状の山がアイスランドでは多く見られる。氷河時代に山頂が削られたためとの説明であった。

第7図はプセウドクレーターと呼ばれる珍しい地形である。これらは溶岩の噴出による爆発でできたものではなく、太古の昔存在していた湖の底で、上昇してきた溶岩により水蒸気爆発が起こった結果の地形である。付近一帯には岩石が全く見当たらず、牧草原の印象である。



第7図 水蒸気爆発の痕跡

レイキャビック

船はアイスランドの最北端を回り

南下、7日間の航海を経て首都レイキャビック入港。

1986年、レーガン大統領とフルシチョフ書記長が冷戦終結に向けての会談を行った。記憶されている方も多いのではないかと。会談を行った瀟洒な建物が残っている。

バスで移動中、市街地に大きなタンクを見た。地底から湧き出す大量の熱水を貯蔵し、各家庭に熱源として送り出すための貯蔵設備であるとのこと。火山島の恩恵である。地熱発電も恩恵の一つで、アイスランドで必要な全電力の約20%を賄っている。

溶岩台地を走ること約1時間、世界の滝のナンバー10にも選ばれたグトルフォス（黄金の滝）を見る。氷河からの大量の水が2段となって流れ落ちている。迫力のある滝であった。



第8図 黄金の滝

シンクヴェトリル国立公園

目指す地球の割れ目が見られるというシンクヴェトリル国立公園に到

着。バスを降り近くの小高い丘に立つ。空高く視界は素晴らしい。さて、地球の割れ目はどこかと目を凝らす。目の下には一見平坦な大地溝帯が北東から南西に向けて走っている。大西洋中央海嶺の通過地帯である。

此の地溝帯は既に述べたように、北米プレートとユーラシアプレートとの境に当たるといわれている場所である。



第9図 大地溝帯を介して北米プレート側を望む

第9図の写真は、ユーラシアプレート側から北米プレート側を、大地溝帯を介して遠望したものである。北米プレート上の山塊を確認することは出来なかった。しかしここから数kmないし数十kmの近くにある北米プレート上の山塊が年に1cm程度の速さで西に向けて離れていくという。

日本の東北地帯以北の岩盤は北米プレート上に乗っかっている。アイスランドと日本との距離は約9千kmであるから、現在の日本付近の北

米プレートは約9千万年前にこの付近から生まれたことになる。

最近の説によれば、大西洋中央海嶺から生まれた北米プレートとユーラシアプレートは、夫々西と東に分かれて地球を一回りし、再び日本の日本海側でめぐり合うという。日本海中部地震（1983年）や北海道南西沖地震（1993年）発生を契機に報告された。

北米プレートを介してのアイスランドと日本との結びつき、新しい知識であった。

地球の割れ目、ギャオ

目前に見渡される地溝帯には、アイスランド語でギャオと呼ぶ無数の割れ目が走っている。一つ一つのギャオは最大幅10m程度、深さ30m程度、北東から南西に走る地溝帯に平行な、数百mから数km程度の細長い溝であるという。このような無数のギャオがアイスランドの地球の割れ目地帯に分布しているといわれている。

ギャオをめぐる遊歩道を1時間程散策する。ユーラシアプレート側の絶壁を下る。断崖が続いている。（第10図）

絶壁を降り平坦な場所にでると、あちらこちらにギャオと呼ばれる細長い割れ目が点在し、澄んだ水を静かに湛えていた。他所では見られない珍しい地球活動の一端を垣間見ることができ、好奇心解消に大きな満足感を覚えた。

帰りのバスの中で考えた。9千万年と言わず、1万年後には今の世界はどうなっているのだろうか。



第10図 ユーラシアプレート側の絶壁



第11図 深い水を湛えたギャオ

いや1千年後はどうか。いや百年後は？ もっと身近に10年後は？ そうか、10年後は地球上から自分自身消え去っているのか。するとそんな未来の事を考えてもしょうがないではないか。そこで思考停止状態となり、窓越しに透き通った青空を眺め、ため息をついた。以後船に帰り着くまで記憶が無い。

オークニー諸島

終日ノルウェー海を走りイギリス領オークニー諸島の中心地カークウォールに入港。温暖な気候に恵まれて、5千年以上の古代から人が住みつき、その住居跡が整備されていた。またその近くに巨石を集めたストーンサークルを見ることが出来た。これらは世界遺産にも登録されている。



第12図 ストーンサークル

約30年の昔、交換教授として英国滞在中、ストーンヘンジを中心に南イングランドの巨石文化（ケルト族の造作といわれている）を探し歩いたことがある。

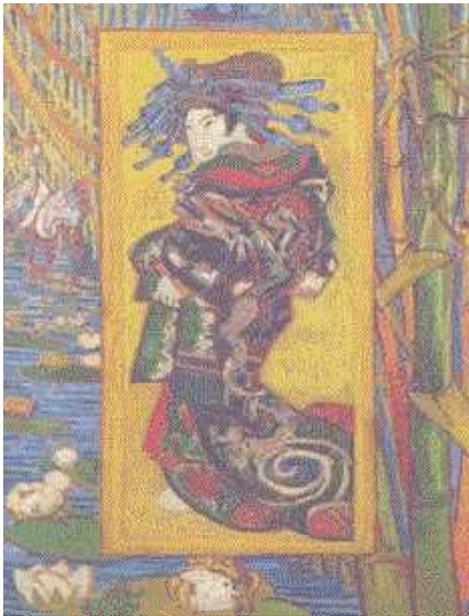
その折観察した巨石のストーンサークルとこの地の巨石ストーンサークルとは全体の構成が非常によく似ている。イングランド本島から海を介して遥か北にあるオークニー諸島で発展した古代人の巨石文化と、遠く南に離れた南イングランドに散在する古代人の巨石文化との関係がどうなのか。時代考証を含めて関連を知りたいと思った。どの程度研究が進められているのだろうか。

アムステルダム

最後の寄港地アムステルダムに上陸。ゴッホ美術館参観の後、運河クルーズ。

30年以上の昔、国際会議出席の際、アムステルダムで1泊。小遣いに乏しく、観光船に乗れず、運河の周りをうろついた思い出がある。

ゴッホ美術館の印象はヒマワリの絵を初め強いものがあった。特にゴッホの描いた浮世絵が頭に焼きついている。江戸時代の文化のエキスがゴッホにより再現されている。優れた芸術作品は古今、東西を超えて人々に恵みを与えることに感動を覚えた。



第13図 ゴッホの浮世絵

ハンブルグ

早朝ハンブルグ港に到着、下船。10年に1度のハンブルグ国際園芸博覧会見学。様々な珍しい花、そして樹木が面白く、日ごろの運動不足解

消もあって、広い敷地を隅から隅まで歩き回った。

宿泊したホテルはハンブルグ大学のすぐ近くであった。現役時代、ハンブルグ大学工学部のGunser教授と親交があり、大学を訪ねた際、極低温での磁気測定を手伝ったことがある。実験を終えて教授とハンブルグの街を歩き、食事を共にした記憶がかすかに残っている。あれから30年以上、その当時の研究者は誰もいないであろう。自由時間はあったが、大学の構内に足を踏み入れることは思いとどまった。

あとがき

地球の割れ目への好奇心を満たす、アイスランドへの船旅であった。ただ、利用した客船はレベルがやや劣り、参加者の不満を招いていた。イタリア系であることから美味しいイタリア料理を期待したが、満足は得られなかった。

最近では日本でも客船によるクルーズが次第に盛んになってきている。北米や、ヨーロッパでの僅かな乗船経験ではあるが、参加者は庶民レベルの者が多く、決して裕福な人たちではなかった。

成田からヨーロッパまで初めて直行便を利用した。現役時代はモスクワ経由またはアラスカ経由で長時間の旅程に悩まされた。今は約10時間弱で有難さを痛感した。これからも元気で生きている限り世界を見て歩きたいと思っている。